

教育

データ使いこなし ドキドキの未来へ



雲雀丘学園高校

林宏樹先生

はりのある、よく通る声の林宏樹先生。教室の集中力
が高まっていく!! いざれも雲雀丘学園高校

必修科目「情報Ⅰ」 2025年1月から大学入学共通テストに新設される。試作問題も公表され、各校で手探りの授業が進む。大学側の対応はさまざま、北海道大学は25、26年の一般選抜では点数化しないと表明している。

授業が終わると、柏原真隼さん(16)は「ものがはやるのは時代背景や経済状態などいろいろなことが関わっていると分かつて、とてもおもしろかった」と話した。

この視点を取り入れ、次回か

ザインが伝わりやすいのかを考え、ポスターを作り直していく。

この日の授業は「統計ボスター制作」。夏休みに、それぞれが好きなテーマで提出した宿題。たとえば「ドラマの視聴率の比較」とか「女性の社会進出」などを調べたものだが、その出来具合が先生は気に入らない。教室を見渡し、「田グラフや棒グラフを並べて、あたりたりの説明では何も伝わらないよ。データを集めてきたのはいいけれど、聞き手を納得させるポスターはできている?『なるほど』と思わず説得力が足りない」。

そうかー。せっかく頑張ったのに。じゃ、どうすればいいんだろう。空気が一瞬重くなる。「勉強できる」…と会話を遡色ないスピードでどんどん書き込む。それを先生が画面上でまとめて飛びついたには必ず理由がある」とデータの裏側の「社会を見る」anzaに誘う。この日、教材に使われた動画は京都大経営管理大院の山内裕教授の「なぜマクドナルドはハンバーガーを世界中に売る」とができたのか?というものが、はやつた理由を書いてみて」と事前の考えをまとめさせた。

世界はめまぐるしく変化し、デジタル化へと加速する。ワクワク、ドキドキの未来を生み出す発明や世界を人工知能(AI)でつくり出すのは人間だ。まずは第一歩。あふれるデータを自ら使いこなしていく力を身につける。2022年度から高校に取り入れられた教科「情報」。必須科目「情報Ⅰ」と選択科目「情報Ⅱ」が始まった。学ぶのはパソコン上の基礎技術に加え、ものごとを多面的にとらえる問題解決能力だ。(鈴木久仁子)



画面上にどんどん意見が書き込まれ、関連あるものは線をのばしてつないでいく

流行の本質、社会背景から迫る

ますます重要な教科に
推薦者=中井啓之校長先生 林先生の前任校は兵庫県内の公立高校。数学科と情報科の専門教諭として頼りにしています。これからますます重要になっていく教科で、まだまだ専門教員の数は足りません。過渡期ですが、生徒たちにはしっかり学び、世界に羽ばたいてほしい。

さつそく画面上に、いくつもキーワードが現れた。「スタイルホームが増えた」「アイドルも使用」「韓国、中国のものを取り入れる時代」…と推測。そこから関連付けて導き出すと「ジエンダーの考えが浸透したことによるマーク」「強そうな女性のイメージをつくる」…など、社会現象から流行のマークを読み、本質に迫ろうとする意見が現れ、画面上はどんどん深化していく。

先生がここで「社会を見る」ノベーションが生まれるために、もっと必要なことは「文化をつくる」こと。「なんとかはやつた」ではなく、表に見えない社会背景を読み取ると、理由がわかる。

先生がここで「社会を見る」練習として出したお題は「純欲メイク」。中国発で最近、日本の女子高生にも大人気の化粧法。「清純さと色気」を演出する独特のマークだ。人気の裏側を探っていく。

つまり時代をつくるようなインフルエンサーが生まれるために、もっと必要なことは「文化をつくる」こと。「なんとかはやつた」ではなく、表に見えない社会背景を読み取ると、理由がわかる。

めたり、削除したりして整理していく。

これを踏まえ、動画で明かされる答えは「マクドナルドは子どもたちにとってドキドキさせる場所だったから」。ん? どういうこと?

マクドナルド兄弟が売り出し始めた頃のアメリカは毎日家族で食卓を囲み、狭い共同体での暮らしだったが、「子どもがカウンター」で自分の好きな商品を選んで、買い物をすることは自立につながる初めてのドキドキ体験だった。未知の世界に一步踏み込んだ感覚は大人になつても忘れない」。